

林間放牧等による低コスト肉用牛繁殖経営 ～裏山放牧で「ゆとりある繁殖複合経営」を実現～

青森県三戸郡三戸町 野中 耕進：繁殖牛40頭

青森県 三八地域県民局 地域農林水産部 上原子 俊之

青森県三戸町は北日本太平洋側の地域としては「ヤマセ」の影響が少なく、比較的温暖な気候であり、水稻、にんにくなどの野菜のほか、葉たばこや果樹、畜産などを組み合わせた複合経営の盛んな地域です。

野中さんは昭和35年頃から酪農を始められ、当時から裏山を利用した放牧酪農に取り組んでいました。その後、平成5年に肉用牛経営へ転換し現在に至っていますが、とうもろこしサイレージの利用と林間放牧などによる低コスト生産により、飼料高騰にも負けない経営を実践しています。

1. 経営概要

野中さんは黒毛和種繁殖雌牛を40頭（育成牛3頭、子牛22頭）のほか、水稻400a、にんにく40aの複合経営を営んでいます。このほかに採草地300a、サイレージ用とうもろこし畑300a、林間放牧地1300aがあります。林間放牧地の中には、300aの人工草地を帯状に配置しています。

労働力は野中さんご夫婦と父の3名です。繁忙期の異なる作物を作付けすることと併せて、5月～10月まで放牧することで飼養管理に要する労働力を軽減し、無理のない複合経営を営んでいます。また、生産された堆肥は飼料畑へ利用するのはもちろん、水稻、にんにくにも積極的に利用することで、耕種部門での肥料費低減にもつながっています。

2. 飼料高騰対策等への取組み

(1) 裏山利用による林間放牧と施設費の低減
酪農時代から放牧に取り組んでいた野中さん



林間放牧地の様子

は、肉用牛経営に転換してからも「牛は外で飼う」ことを基本に置き、「畜舎などは簡単なもので十分」と語っています。畜舎の裏山を林間放牧地として利用し、5～10月までの期間、朝～夕の制限放牧をしています。牧区は管理作業の面から1牧区制とし、分娩2～3月後の親子を放牧しています。

朝、牛の健康状態などを確認した後はすぐに放牧し、夕方まで牛まかせにしていますが、ここ数年間、放牧地内での事故はありません。また、放牧できない冬期間においても毎日パドックを開放し運動させています。平成20年には林間放牧地の周囲全てを電気牧柵としました。放牧地としての面積は、飼養頭数に対して少ないことから早春や秋期には草量不足となります。このため、この時期には自家生産や近隣の公共牧場から購入したロールベール乾草をパドックで給与しています。

牛舎は酪農時代の1棟のほか、飼養頭数の拡大に合わせて、パイプハウスを利用した畜舎を建設しました。現在、このパイプハウス牛舎は2棟ですが、いずれもそのほとんどを自力施工により建設しており、専門業者に依頼したのは屋根・溶接などその一部です。



パイプハウス牛舎（敷料はモミ殻）

(2) とうもろこしサイレージの利用

肉用牛経営に転換してからもとうもろこしサイレージを利用しています。

とうもろこしサイレージはそのエネルギーのみならず、牛の健康面や繁殖などに寄与する重要な飼料として考えています。サイロは牛舎間などのスペースを利用したトレンチサイロとして、施設経費を抑えています。踏圧・密封の基本技術の励行により品質の良いサイレージを作り、12～5月頃までの約半年間、成牛1日1頭当たり7～8kg給与しています。

とうもろこし畑は近年、熊害が発生することが多くなり、この対策として周囲を電気牧柵とするなどあくまでも冬期間の給与飼料はとうもろこしサイレージを基本としています。



空きスペース利用したトレンチサイロ

3. 取組の効果

これらの取組みにより平均分娩間隔12.3ヵ月、受胎に要する平均種付回数は1.3回以下と地域で

もトップクラスの繁殖成績を誇っているほか、子牛の平均販売価格についても560千円（18年実績）と高い水準となっています。青森県の子牛市場は、県種雄牛第1花国の高い市場評価もあり、全国でも上位の販売価格で推移していますが、自家生産牛を中心に血統・繁殖成績・育種価などを基準に改良を重ね、県共進会でもグランドチャンピオンに輝くなど、野中さん自身が購買者の高い信頼を得ていることも大きな要因となっているものと考えられます。

また、飼料自給率はTDNベースで約40%と、放牧やトウモロコシサイレージを使っている割には高くありませんが、これは採草地面積が少ないことや子牛育成に要する濃厚飼料の量がやや多いのも要因となっています。これの対策として、乾草を地域の公共牧場から購入しており、粗飼料自給率のTDNベースでは、約70%となります。

区 分	実 績
平均分娩間隔	12.3ヵ月
受胎に要した種付け回数	1.3回
子牛販売平均単価	560千円
成雌牛1頭当り年間所得	228千円
飼料自給率（TDN）	39.7%

経営・技術主要諸元（H18実績）

4. 今後の課題・目標

今後は、子牛価格の下落等にも対応しながら、現在の労働力で無理のない複合経営を継続していくために、繁殖雌牛を50頭規模まで増頭することを目標としています。

そのためには、サイレージ用とうもろこしの栽培面積を拡大するとともに、草地・飼料畑の適正管理により自給飼料の生産性を高めていくことが必要であると考えています。また現在、市場出荷する子牛は、去勢平均で生後310日令、体重310kg程度あることから、出荷日令の短縮、増体量の改善などが必要であり、哺育・育成技術の改善、さらなる繁殖成績の向上などにより、子牛生産費を低減していきたいと語っています。

（かみはらこ としゆき）